

夢窓國師の遺誠

夢窓國師は七帝の國師として朝廷の歸依厚かつた高德である、
 峨嵋天龍寺の開祖として一代の榮華を極めたる明僧であつた、今
 も天龍寺に在るてふ遺誠にいとありがたきものがある、いはく、
 我に三等の弟子あり、所謂る猛烈諸縁を放下し、專一に己事を
 究明す、是を上等と爲す、修行不純、駁雜好學、之を中等と爲
 す、自ら己靈の光輝を味まし、只佛祖の涎唾を嗜む、これを下
 等と名く如しそれ心を外書に酔ひ、業を文筆に立つる者は、此
 はこれ剃頭の俗人なり、以て下等と作すに足らず、矧んや飽食
 安眠、放逸時を過すものは、之を緇流と謂はんか、古人喚んで
 衣架飯囊と作す、既にこれ僧にあらず、我弟子と稱して寺中及

び塔頭に入出入するを許さず、暫時の出入も尙ほ以て容さず、
 何に況んや來つて掛搭を求むるをや、老僧如是の説を作す、博
 愛の慈の缺くと言ふとなかれ、たゞ他非を知り過を改むるを要
 し、祖門の種艸たるに堪ゆるのみ。

嗚呼刻下滔々たる天下の衲僧と稱するもの所謂る剃頭の俗人、衣
 架飯囊たらざるものそれ幾人かある、可惜乎曉天の星よりも尙ほ
 尠であらふ。

畫禪一味

畫禪一味の消息は、拙著禪學講話中に禪機と畫趣を論じてお
 たが、今こゝに掲ぐるところは、浦上春琴の畫論の詩である、そ
 の詩にこういつてある。

學畫與禪同

敗筆難成塚

不知在魔界

一因天分低

讀書問古人

結跏或多年

動即墮狐禪

畢竟是何緣

一因名利纏

忘我求自然

即ち知る真箇の畫を描かんとするには、禪者のそれと同じく、名利を脱離せんければ、妙域に到るとはできぬとの誠である、宜なるかな、彼の如雪や雪舟の如きはよくそが範を垂る。

四聖の眞面目

釋迦佛陀の眞面目は、靈山會上で金波羅華を拈じて八萬の大衆に示したる時にあり、孔子の眞面目は春風浴沂の章において見ゆ

モリストの眞面目は、一輪の百合花を拈じて、ソロモン、の榮華もこの一朶の花にだも如かずとさげびたる時に現れ、ソクラテスの眞面目は、意は死すとも眞理は死せずと言ひて毒杯をあかいで死する、時に見えたり。

東海和尚が河豚の畫賛

東臯心越禪師の會下に東海和尚といへるがあつた、好んで河豚を畫きたりと、時々東奥の間を歴遊して漁夫の家に寓し、河豚の游泳する實況を見ては心をこめて之を寫生し、遂には其妙域に達するを得た、そして常に人に語つていはく、河豚は之を食は、毒ありといへども、描きては何の害もなし、その眼のおかしく、腹の福々しきさま、まことにめづるに足れりとて、畫を求むるもの

あればつねに必ず河豚を畫きて與ふその上に賛して、

東海之富久、

是對南山壽、

陽春歌此曲、

祝以樂千秋、

道は貧にあり

曾て龍牙禪師は學人に訓示していはく、學道は須らく貧を學ぶべし、貧なるときは道却つて親しと、真なるかな言や、世の道を學ぶものその多くは富貴逸樂によつて障へらるゝのである、其訓示心に銘すべきである。

關山國師と隱元禪師

日本黃檗の開祖隱元禪師かつて妙心寺に登つて、關山國師の微

笑塔を拜した、その時聞きたるは、國師の語句であつた、即ちその語に、

慧立這裡無生死、

柏樹子話有賊機、

隱元語下に於いて直ちに恭しく禮拜して、以爲らく、世尊四十九年の説法も畢竟這箇の二句に出ですと、深く感歎し去れりと。

藤房卿と僧文觀

今は昔し藤原萬里公藤房公の許へ、楠正成と赤松圓心と二人が來た、所で藤房出迎ひて、四方八面の物語などして居られた處へ又候一人の法師がやつて來た、それは文觀法師であつた、君寵厚き法師であるから矛盾などもたせ馬などひかせて威風堂々たるあり

さまであつた、乃で藤房卿文觀に向ひ惡僧ごのに訪ひよしなしを
ごもなりといへければ、文觀、顔色をかへてサテも惡僧ごは如何
なるわけか、邪見放逸の僧をこそ惡僧ごも云ふなれど左あらぬも
のをと云ひしに、藤房卿、智ある人にて、戯れに取りなし、朝廷
の臣につらなれども臣の道を行はなければ、良臣ではない、和僧
もその如く、佛の教の道を行ひ玉はねば眞の僧でない、善でなけ
れば惡、眞でなければ偽ちや、和僧は惡僧、臣は惡臣ちやと答へ
たまふたれば、文觀も一言の言葉もなくすごくと歸つて仕舞ふ
たので、圓心つくくと聞いて居つたが、サテ、文觀は世にな
らびない君の寵愛を蒙つてる僧でありしをかくまでさかしらを宣
ふものかなと云ひたれば、傍に聞いて居つたる正成のいはるるに
は、いやとよ、是は戯ながら貴きことにこそ、をりなくては、い

かでかゝるをきかんとさ、やきければ、藤房卿はこれと聞きた
まひて、正成の賢にて、我短を貴まるこそ憚多けれ、圓心のさ
かしらを云ふとは、よしなかるべし、圓心さばかりの戦功あれど
も、その賞すくなきは、和人の不幸をおもひ、上を恨むる意をす
てらるべし、正成の宏才も、時にあはざれば益なし、惡僧なれど
も、文觀等の時を得て富めり、不義にして富めるは、夫子の惡む
ところなり、我も人も會して善行を求むる事こそあらまほしけれ
重賞のもとに死有りて候、兵書の文なり、臣たるものの守るとこ
ろならずや、臣として義の爲めに節を守る教こそたふとけれ、百
年の齡をたもちて、わづかに三萬六千日、一旦の榮耀は浮べる雲
のごとし、何ぞ是こそ就て義名を墜し、君にむかつて怨をふくまん
聖人不君につかへて、其君の非を非とせず、その身を非にして、

非に事よせて國を去る、聖人の行にこそおよばざらめ、君に恨をなす事あらじと語りたまひき、正成これをきよて、これ偏に圓心が憤あらんを知りたまひて、君の爲めにのたまふにこそと深く感じける、圓心は何事も聞きしらず、畏つて居ける藤房、

けふまでもあればあるかの身をもちて

夢の中にもゆめをみるかな

といふ古歌を吟じて、涙ぐみたまひければ、正成さては世をなかくも思ひたまはぬこそと、そゝろに涙をながし歸りぬ」(道灌のつれ／＼草の意を取る)

さてこの文觀とは如何なる素性の僧にて藤房卿に幕頭に惡僧と喝破せられたるかといふにこの僧は密部のものにて、彼の陰陽兩部交接の道を邪解して、畏れ多くも後醍醐天皇を誘惑し奉りて、

龍遇を一身に集めて、剩さへ多くの官女を妻妾にして淫樂に耽つて居つたる妖僧であつたが、人のこれをはばかつて一人も彼れ此れといふものなかつたのである、しかるに藤房卿ひとり幕頭に惡僧よと喝破せられたるは實に獅子の一吼にして彼妖魔野干の腦破裂せしならん、しかも、卿は臣たるものゝ道を説き、暗裡に側にありし圓心を慰諭せしごときは、眞に藤房卿の如きは時に身は遁世するも心は常に君を思ひ、國を思ふの赤誠にありしことを知らる。

大石良雄と華岳寺の小僧

(良雄寺の小僧に喝破せられて憤起)

元祿十四年淺野侯自刃して赤穂城を沒收せらるるや、國老大石

良雄、侯の香華院たる華岳寺に詣ふで、方丈に見え、此度の大變事を語り、且つ今後の事などについて途方に暮るるよしを物語りた、時に和尚の背後に侍坐し居たる一沙彌(小僧)十一二歳なるが、良雄の言を聞きやいなやツカ／＼と良雄の前にすゝみ出で、憚るところなく、良雄に向つていふやう、御邊いやしくも一藩の城代をもつとむる身分にも似合はざるいと卑怯なることをいはるゝものかな、この期にのぞみて何の途方にくるゝことのあるべき、古語にも君はづがしめらるれば臣死すとの本文あるではないかと良雄この小僧の語をきゝて、いたく感憤し、頭をうちなでつゝ、まことに末頼母しき鳳雛なるかな、願くは君公や吾々の菩提をむらひたまひてよと涙ながらに別を告げて赤穂を去りさす。

如何なるか是れ〇〇村の土百姓

(島津侯と無參和尚)

種姓を考ふることなかれ、容顔を見ることなかれ、非を嫌ふことなかれ、行を考ふることなかれ、たゞ般若を尊重せよ、とは永平高祖の遺訓ぢやが、多くの凡夫はなかく、そうはゆかぬ、兎角人によつて法に依らぬがちになるぢや、殊に左の大名などと來ては、祖先累代の菩提寺の和尚を恰も臣下の如くに扱つたものぢやこゝに薩摩は島津侯の香華院なる福昌寺の無參和尚といふは同領内の〇〇村の土百姓の子であつたが出家得道の上遂に其學徳の功によつて島津侯の香華院の住持となつた、藩侯も其高德を仰いで數々禪要を問はる、或時候幕直に問ふて曰はく

如何なるかこれ〇〇村の土百姓
と侯の眼中にまだ無參和尚の種姓がチラツイてると思えた、乃
で和尚直下に

蓮は游泥より生じて游泥に染ます
と答へた、侯作禮して去つたとある、苟くも三界の大導師たる
自覺あるものは斯くありたきものぢや、流石は彼れ大西郷南洲翁
に痛棒を喫せしめただけあつて、宗教家の權威を發揮せしはいと
もありがたきことぢやわい。

ヒトロゾオ氏の達磨贊

六祖慧能大師いはく、人に南北有といへども佛性本南北なしと
眞なるかな、露國公使ヒトロゾオ氏の如きは身は天主教國に生れ

天主教徒の家庭に養育せられ、天主教の教育を受けながら、空劫
以前から深くひそみし本具の佛性が現はれて夙に菩提達磨圓
覺大師を仰慕し、自ら大師壁觀の姿に扮して之を畫かしめて信仰
せりと、公使はかつて自國の語を以て大師を詠じたる贊詩一篇あ
り、今その譯したるものを見んか、

法○の○法○を○は○た○つ○ね○ん○ど、
長○き○年○月○つ○か○れ○す○に、
渠○は○無○益○に○原○ね○け○り、
小○暗○寺○の○一○室○に、
そ○こ○に○原○ね○し○其○物○は、
渠○は○自○ら○言○ひ○け○ら○く、
心○の○法○を○外○に○し○て、
達○磨○大○師○は○い○み○じ○く○も、
此○世○の○中○を○歩○み○け○り、
堅○く○其○身○を○閉○こ○め○ぬ、
い○と○寂○し○く○た○い○一○人、
其○身○の○内○に○見○出○し○ぬ、
豁○然○と○し○て○悟○り○た○り、
何○處○に○法○を○原○ぬ○べ○き、

心●を●唯●一●の●御●法●な●る●、
 こ●よ●な●き●天●地●の●御●法●な●る●、
 と、斯●く●も●彼●は●心●外●に●別●法●な●き●の●大●乘●佛●教●の●真●理●に●諦●達●し●た●り
 し●に●、可●惜●乎●、天●之●に●年●を●假●さ●ず●、即●に●彼●世●の●人●と●な●り●ぬ●と●、ア

拔隊と月庵との組打

ひかし、塩山拔隊と但馬月庵と組うちす、敵の一人をくみみせ
 見れば、くわらをかけたる故に、上より汝は何宗と問ふ、下よ
 り答ふ、月と見てゆびさすことなかれ、また上より、いかなる
 かこれ劔刃上の一句と問ふ、下より紅爐上一点の雪と答ふ、又
 上より、消えての後いかにと問ふ、下より、とくれば同じ谷川
 の水と答ふ、そこに、さとりたる武士をむざ／＼ころしてい

かよと引おこしたすけける、これ塩山の拔隊、但馬の月庵とて
 名ある二人にて、かくれなきことなりと
 と、こは大徳寺清巖渭禪師の法語中にありきと、森大狂氏語る。

南泉斬猫

是れは碧巖集の第六十三則にある公案で、一寸と素人には判り
 かねやうと思ふ、ちやが思ひついたとちやから彼の有名は風外老
 師の提唱になつてる一節を紹介して見やう、會と不會とは讀者の
 根機にまかせるとしやう、そこでこうちや「南泉一日東西両堂猫
 兒を争ふ、南泉見て提起して曰く、道ひ得ば斬らずと、衆無對、
 泉猫兒を斬却して兩段となす、泉また前話を舉して趙州に問ふ、
 州便ち草鞋を脱して頭に頂いで出づ、泉曰く、子若しあらば恰も

猫兒を救ひ得ん」と、風外老師曰く、人々本來の面目を互に主宰とならふとして、其那一實はそつちのちやこつちのちやと猫の毛色をあらそふ故、南泉提起してサア、道へ一句我心にかなはいたすけ、若しかなはずんば斬るといはれたが、人々だう道て泉の心になふな、猫であつてよいが、若しあの佛經山ならばなんとつかまつるかな、泉必ず別に手段あるべし、汝が喪身失命の時節ぢや、サア、此ぬきみの下をくいつて見よと、猫を提起したのぢや此一間に逢ふは、兩堂も如何ともしがたい、先には争ひ得たのに何んに依てか今は争ひ得ぬぞ、言詮不及意路不到ぢや、是とも非とも云ふとがならぬ、こゝが大事のところぢや、兩堂の僧如何ともせざるゆへ、泉止むを得ず命を行せねばならぬと、つゝかけた鎗さき佛祖も喪身失命ぢや、進むに當て進まず、やくにたゝぬや

つらぢやとザツクと斬つた、是に於いて罪になるのならぬといはれる處か、猫一疋が天下の大事佛法の興廢に係る處ぢや、南泉本分の宗師ぢや、兩堂の僧提起の處でも透脱がならぬ故に斬たが、斬た處でも透脱がならぬ只趙州一人のみ、南泉と同死同生せられた云々、又曰く、先師曾て興聖に住するの日、一僧あり槩山より到る、茶話の次で、問ふて曰く、南泉斬猫の意旨如何と、先師云く、南泉は且らく置く、閻梨の斬猫作麼生と、僧便ち歌ふて曰く猫ぢや〜とおしやますが猫が下駄はいてしぼりの湯かたで來るものかと、先師微笑して云く、好箇の久參、客僧大に喜び又雜談し喫茶して出づ、先師之を送つて方丈門に到り高聲に云ふ、ソレ〜其猫兒を踏み殺すこと勿れと、僧大に驚きあはてゝほとんぞ倒れんとす、先師勸破了々々々云つて便ち方丈門を閉却すと、

風外老師の婆説に實參實究したならばそれで人々本分の猫を救ひ得らるゝぢや、敢えて趙州見たやうな手品はせぬともよいぢや。

悟庵雜詠

(大正四年退京して再び禪堂生活に還つてからのもの數首)

○答東都之學友

七尺繩床任屈伸、溪聲山色養吾真、不知世俗爭名利、我是行雲流水人。

○菜根譚開講

(大正四年夏安居於常泉寺)

儒佛道教同一味、恰如群類現太空、春來萬木芬芳發、秋到千山見落紅。

○夏日山居

前峰後嶺綠珠聯、閑對白雲聽岩泉、三伏炎塵飛不到、心頭滅否不關焉。

○行乞所感

自出僧堂已二旬、任運飛錫幾山津、此行的意人知否、視俗察風混世塵。

○保寧山之初雪

(保寧山也者顯聖寺之山號也、時維大正四年十一月三十日也)

保寧風景見尤奇、獨探詩腸初雪時、一夜疎々窓外靜、曉來埋斷早梅枝。

○其二

此時此景欲題詩、賞觀浮生半日間、曉樹花開千點雪、春山難比保寧山。

○其三

六出翻々聲更幽，保寧山景自風流。只看欄外銀千樹，獨坐題詩黃葉樓。

○讀書學雜誌

書學拂塵出，入神多歲工。風清泰岳麓，萬象一管中。

(本會長者、書道之大家柳田泰範先生也故及轉句焉)

○丙辰歲旦

寶殿迎春祝萬歲，野僧珍重坐和風。新年佛法如何問，松竹青々梅葉紅。

○丙辰元旦

炷香祝聖吉祥晨，松竹粧來萬象新。硯海水融韶景別，詩園花發一枝春。

○延命山頭觀梅

延命山頭紅白梅，清香馥郁入樓臺。想思月下羅浮夢，覺後窓前句句催。

○其二

梅開菩薩万行躰，玉骨冰肌塵外心。曳杖吟哦斜日暮，影移溪水碧雲潭。

○讀天海老師之言行

一夜禪房讀此編，乃翁面目躍如然。恂々侃諤親言語，縷骨銘肌得實全。

○春日山行

盡日香鞋詩思濃，桃櫻既落躑花紅。採藜折蕨遍山野，杳聽暮鐘歸晚風。

○晚春山行

晚春此日雲煙霽，綠葉紅花山色新。不覺情僧乘好景，曳筇徐步動詩神。

○春雨偶成

春雨蕭々一日長，曉來回顧半如忘。書窓讀倦枕肱睡，洗夢滴聲簾瀝香。

○春日雨後

濛々烟霧曉來霽，喜見池塘綠草新。最好青山雨過後，十分芳色絕纖塵。

○雨後山行

雨霽日暄乾路泥，曳筇携友入松蹊。香鞋踏遍春山上，風色明媚詩思迷。

○托鉢所感 (答客問)

飛錫西濱托鉢身，三衣行拂絕紅塵。此間消息君知否，非利非名傳佛真。

○行脚僧 (自況)

住無定所去無方，雲水悠悠風月長。野衲本家君若問，青山到處是吾鄉。

○夏日山居

青巒層裡養頑全，風骨澹然自欲仙。堪嗤世人呼避暑，溪邊松下臥雲眠。

○初夏登青原山榮雲寺

衲僧初到青原上，仰見榮雲添瑞新。最好綠陰幽邃境，溪聲山色絕纖塵。

○奉頌默仙大禪師盛德

落々胸中見不偏、明々古鑑臨機圓、洞門掃盡浮雲霧、月白、
風清祖嶽巔。

○奉追悼性海慈船大禪師並慧光玄照大禪師

性海湛然清似鏡、慈船度盡絕生緣、慧光赫灼金天明、古錦
織成玄照鮮。

○奉賀石月無外老師古稀。

壽席恭開好吉辰、壽星高照古稀春、壽香馥郁玉觴裡、壽至
風清月白人。

修力
養ある

禪林清話 (終)

力ある修養
禪林清話

不許複製

正價金六拾五錢

大正六年二月十五日印刷
大正六年二月二十日發行

著作者 秋山悟庵

發行兼印刷者 磯島瑛市

發行所 文瑛書院

發賣所 弘學館

大正六年二月十五日印刷
大正六年二月二十日發行

東京市日本橋區檜物町
振替口座東京二二〇番

大阪市東區淡路町五丁目
振替口座大阪九九〇八番

金正堂

釋人道白虛・著師禪隱白

法吸呼式腹的禪

釋氷話閑船夜

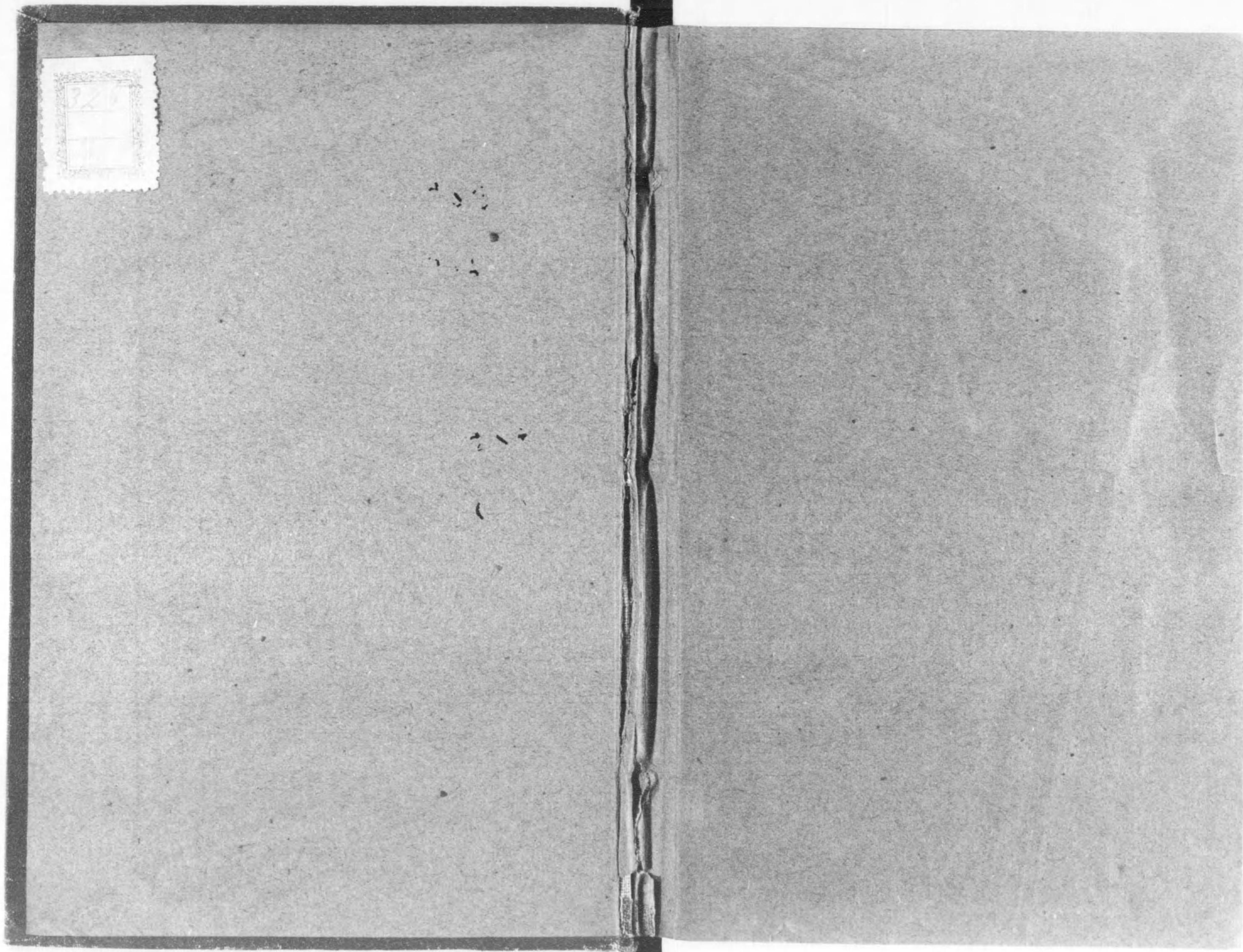
錢六料送 錢拾四金價定・裝美頓トツケホ式新

禪林の名著、夜船閑話は、禪的長壽法を説けるものにして、之を詳釋敷衍せるものは本書なり。禪的長壽法は、今の語を以て言へば、心理的腹式呼吸法なり。此秘法の大成者は、白隱禪師なれども、之が實行の希望者は、恐くは今の吾人ならん。而して、箇中又、煩悶憂鬱等の黒雲を去つて、圓滿自在の光風霽月を望ましむる底の禪學の極致、亦おのづからにして了得せられん、人若し燈下試みに本書を繙かば、拍案一番して、悟得する處夫大ならん。

堂正金 五町路淡區東市阪大 | 館學弘 町物橋區橋本市京東
番八〇九九阪穴替攝 番〇三二京東座口替攝



38



326

終

